

京都・東九条CANフォーラム

ニューズレター第9号

2012年7月20日 No.006

この号の内容

- p1. 第43回人権交流京都市研究集会—第2分科会報告その1
- p2. " その2
- p3. 第1回東九条春祭り開催
- p4. 第43回人権交流京都市研究集会—第2分科会報告その3
「事務局からのお知らせ」

東九条名物シリーズ 農楽(ブンムル)その1



農楽は農村において、春には豊作を祈願する祭りとして、夏には収穫期にその農作業を癒すために、また秋には収穫を祝うお祭りの中で、農業の営みとともに伝えられてきた。日本による植民地統治期に、伝統音楽のうち宮廷音楽を指す「雅楽」(大韓民国成立後は「国楽」と呼ばれる)と区別し、「農楽」と総称されるようになった。韓国では近年、本来の呼び名である、直訳すると「風流遊び」になるブンムルノリ(풍물노리)「風流見世物」になるブンムルクック(풍물극)がよく使われており、単にブンムルとも言う。

第43回人権交流京都市研究集会報告

第2分科会 「多文化共生のまちづくりをめざして」2012年2月18日

昨年10月東九条に「多文化交流ネットワークサロン」が設立されて多文化共生施策も大きく前進し、「多文化共生のまちづくり」が地域住民とNPO等との協議によってすすめられつつある。本分科会ではこうした1年を振り返り、在日コリアン・ニューカマー・中国帰国者など多様なマイノリティの視点から、いかなる「多文化共生のまちづくり」の創造的なコンセプトを発信することが出来るかの議論を深めた。

基調報告 朴実さん

京都・東九条CANフォーラム代表朴実氏から東九条マダン20年間の成果として①地域住民主体の自主的運営による、「多文化共生のまつり」への成長②幼児から高齢者(在日1世から5世)まで世代を繋ぐまつりへの発展③年々来場者が増え(去年は5000人以上)地域に活性化をもたらした④小中学校4校持ち回りで生きた多文化共生教育の場を作れた事を挙げられた。一方課題として①練習会場の確保、資料・資料の保管場所等の不足②民族文化保持活動としての楽器練習・料理・韓紙(ハンジ)・仮面(タル)・チョグリ縫い教室等の日常活動に困難がある事を指摘された。

生活館(隣保)事業と住環境整備終了、人口の減少と少子高齢化、学校の統廃合という中で、今後の東九条のまちづくりに向け「崇仁・東九条エリアマネジメント」準備委員会が建ちあがる等新しい動きも出ている。また「多文化共生ネットワークサロン」活用を基本的課題としつつ、そこで包摂し切れない事業も有ると考える。故に「ネットワークサロン」の別館も一つの現実的な選択肢として「多文化共生活動センター」の設立を求めている、東九条を「多文化共生の息づくまち」にすべく、陶化・山王小学校等の跡地を地域住民もニューカマーも皆が共同で利用できる場を求めての今後の活動の支援を訴えるものであった。

2、報告 劉仙姫さん

京都大学の研究者劉仙姫さんより「多文化共生のまちづくり—ニューカマーの視点から—」と題し、韓国と日本の違い等も含め報告された、現在韓国では国際結婚による外国人移住女性は12万人以上で、9組に1組は多文化家庭となっている。2020年には人口の5%が外国人、多文化家庭が全体の約20%に達すると見込まれ、多文化社会統合は時代的課題となっている。現在質の高い社会的統合を目指し①レベル別韓国語教室運営の拡大②技術教育支援と内・外国人との姉妹血縁③外国人住民を「社会に貢献する住民」として育成するグローバル社会④外国人住民に就職機会を与えて経済的自立力の向上を図る⑤市民参加型(→次頁)

- 個人会員 1口 1,000円
一口 1,000円で何口でも結構です
- 団体会員 1口 5,000円
一口 5,000円で何口でも結構です

- 賛助会員 いくらでも結構です
活動に使わせていただきます
- 特別会員 会費負担なし
どんどん活動に参加してください

**ご協力を頂いたみなさま、引き続き会費納入にご協力ください。
この活動は皆様の支援に支えられ行われています。**

振り込口座: ゆうちょ銀行 00910-7-216594 口座名義: キョウト・ヒガシクジヨウキャンフォーラム



劉 仙姫さん

疎外される外国人を包摂する地域作り、日本人への多文化理解教育増進が必要である



南 珣賢さん

マイノティーの「あるがまま」を求め、彼らが自分らしくいられる場所づくりに今後も取り組んでいきたい



村木 美都子さん

高齢化と共に孤独や不安を抱く人が多く、様々な思いを誰かに聞いてもらえず日々を過ごしおられる方も多い。特に在日コリアン1世は、戦前・戦中・戦後の苦難の日々を過ごして今なお満たされない思いを持ち続ける

(→前頁より)

外国人住民支援事業の発掘拡大⑥官・民連携を通じて体系的な統合支援の推進等の施策に力点が置かれている。例として結婚移住者に対する放送通信教育事業、多文化家庭子女に対する教育協力事業、多文化家庭による社会奉仕団事業、移民女性の職業能力開発事業等が紹介された。

一方で日本におけるニューカマーの定着問題としてはご自分の子育て経験も含め、疎外される外国人を包摂する地域作り、日本人への多文化理解教育増進が必要であり、①自立のための就職能力の向上と就職権の保障強化②外国人の生活便宜システムの構築(住居、文化、言語、医療等)③子供の教育問題(言語と文化的環境側面からのメリットとデメリット)④多文化コミュニティの活性化—外国人間交流や日本人との交流のための多文化施設の必要性⑤地域における多文化政策のためのコントロール・タワーの設置の諸点を指摘された。

3、報告 南珣賢さん

NPO法人京都コリアン生活センター「エルファ」事務局長の南珣賢さんは「在日コリアン高齢者・中国帰国者高齢者の介護の現場」と題する報告を行った。エルファは1999年に居宅サービス事業所として在日コリアン高齢者のための介護事業を中心に障害者支援、子育て支援等の総合的な福祉活動をおこなっている。介護保険は国籍条項がなく日本に居住するすべての外国籍高齢者も日本人同様サービス利用者となったが、保険料は徴収される在日コリアン高齢者が介護サービスをスムーズに受けられないという状況が生まれた。この支援のためにエルファの実践が始まった。異文化を背景にもつ人々が日本に長く生活する中で、その人たちの抱える生活の問題も多様化、複雑化している、同時に教育・医療・福祉の現場は着実に多文化になっている。いま高齢者が増加しつつある中国帰国者の介護問題解決のための支援活動が帰国者の2～3世を中心として始まりつつあり、エルファの経験で支援できると考えている。マイノティーの「あるがまま」を求め、彼らが自分らしくいられる場所づくりに今後も取り組んでいきたいと締めくくられた。

4、報告 村木美都子さん

NPO法人東九条まちづくりサポートセンターまめもやし事務局長の村木美都子さんからは「東九条高齢者調査から見えたこと」が報告された。昨年3月と5月に、京都外国人高齢者・障害者生活支援ネットワーク調査チームの東九条高齢者実態調査が行われた。地域の民生委員や老人福祉委員の協力の下、在日コリアン含む高齢者宅を訪問して生活の様子や困っていること、現在の幸福感などを聞き取り方式で行った。今回の調査で見えてきた課題は『孤独感』である訪問介護・往診などの在宅サービスを受ければぎりぎりまで住み慣れた自宅で生活できるが、大きな心の問題を抱えている人が多いことに気づかされた。高齢化と共に体が不自由になって孤独や不安を抱く人が多く、様々な思いを誰かに聞いてもらえず日々を過ごしおられる方も多い。特に在日コリアン1世は、戦前・戦中・戦後の苦難の日々を過ごして今なお満たされない思いを持ち続けている人が見受けられた。モアの活動の一つとして傾聴活動が行われてきたが、その経験が生かし調査でみえてきたこれらの課題に伝えていかなければならない。調査後訪問・傾聴活動は強めているがまだ十分ではなく、今後さらに外国人福祉委員の活動の充実が必要だと考えている。東九条内外の団体の連携、在日コリアン高齢者の抱えている課題に伝えていくための人材育成や地域の社会資源のネットワーク化が求められていると報告を締めくくられた。

5、報告 小澤亘さん

立命館大学教授小澤亘さんは「多言語DAISYテキストによる学習支援ネットワーク構想を」を報告された。(→4頁に続く)

第1回東九条春まつりが開催される

去る4月7日(土)季節外れの寒風が吹きすさぶなか、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン(以下「ネットワークサロン」)を会場に、第1回東九条春まつりが盛大に開催されました。春まつり開催のきっかけは、昨年暮れ頃 CAN やマダンのメンバー等の何気ない会話からでした。マダンセンター前の広大な空き地を眺めながら、「この空き地何とかならんやろか?」「国の金がつぎ込まれてるから無理やろ」「でも、暫定利用なら何とか出来るやろ」「それにしても、学校も無くなるし益々寂しいまちになるな」「この広場で、でっかいまつりでもできんやろか」「秋はマダンやバザーで賑やかやけど、春は何も無いな」「裏の河川敷も整備されて桜もきれいやし、ここで春まつりでもやろか」、この話が「ネットワークサロン」前川施設長にも伝わり、是非まちの活性化のためにも協力して「春まつり」をやる方向に話しはとんとん拍子に進みました。このようにして第1回準備会議が1月20日に開かれ、開催場所はインフラ問題や雨天の場合を考え、「ネットワークサロン」で開催することになり、開催日程は桜が見頃になる4月初旬をめざし、地域の団体や「ネットワークサロン」に登録している28団体(当時、現在38団体)にも呼びかけていくことなどが決まり、その後準備委員会が7回開かれ、開催日時は4月7日(土)10時～15時と決定されました。

春まつり1ヶ月ほど前から会場周辺地区にノンギ(幟)が立ち並び、カラフルなポスターが貼られるなど、まつりムードを盛り上げてくれました。当初、例年なら4月7日頃と言えば、桜が満開を少し過ぎた頃、春うららかな日和を予想し、花見に誘われた人たちが押し寄せるだろうと目論んでいましたが、今年の春は異常な寒波に見舞われ、桜の開花は1週間以上遅れ、当日は寒風吹きすさぶ中で開催を余儀なくされました。このような悪条件にもかかわらず、1000人ほどの人たちが入場され、舞台出演団体7、出店26、他に子ども料理教室や、車いす体験、起震車体験、エコ体験、運転適性診断、紙芝居コーナーなども設けられました。

なかでも特筆すべきことは、この春まつりに併せ4月2日～13日、同会場で6団体(東九条マダン、オモニハッキョ・ケナリ、希望の家保育園、エルファ、丹波マンガン記念館、JCIL)による合同展示会が開催されたことでした。例年、東九条マダン開催日にもこのような展示が行われていますが、同日開催のためほとんど展示が見られないという声を受けて、今回初めて2週間ロングラン展示が実現しました。

我がCANフォーラムはこのまつりの言い出しっぺでもあり、実行委員会の中心を担い、当日は昨秋の東九条マダンと同じ「すじ焼き」販売を行い、10人以上のスタッフと客で常時盛り上がり(寒さのぎにアルコールを飲みながら)、用意した500食を12時過ぎに完売しました。

4月18日行われた反省会では、年度初めは学校・保育園や行政が対応できないので、もう少し遅らせる(5月連休後)、情宣を徹底的にやる(登録団体や市に協力して貰う)、会場配置に配慮することなどができました。今後は「東九条秋のマダン・春のまつり」と呼ばれ、地域だけではなく京都市民全体の多文化共生まつりとして定着するように継続していきたいと思えます。(朴 実)



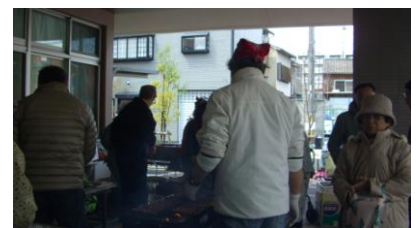
春まつり1ヶ月ほど前から会場周辺地区にノンギ(幟)が立ち並び、カラフルなポスターが貼られるなど、まつりムードを盛り上げてくれました



この春まつりに併せ4月2日～13日、同会場で6団体(東九条マダン、オモニハッキョ・ケナリ、希望の家保育園、エルファ、丹波マンガン記念館、JCIL)による合同展示会が開催された



恒例のブンムル会場一体となった大饗宴会に盛り上がりします



分かり難いですが、すじ焼き販売の風景、飛ぶように売れました「ありがとうございました」



事務局からのお知らせ

- 7月29日午後1時(※1)
モアネット総会と外国人福祉委員
活動報告会
- 7月30日午後7時(※2)
東九条エリアマネージメント準備会
ワークショップ
- 8月11日午後6時
崇仁夏祭り(楽洛ひろば)
- 8月25日午後6時
東九条夏祭り(北岩本公園)
- 9月9日午後1時(※3)
京都東九条 CAN フォーラム総会
と学習会「多文化共生条例につ
て考える」

京都市「国際化推進プラン」は努力目
標なのか、行政が果たすべき義務なの
か？条例化することはできないのか？

(※1,2,3)の会場は京都市地域・多文化
交流ネットワークサロン

TEL: 075-671-0108

FAX: 075-691-7471

京都・東九条 CAN フォーラム
〒601-8013 京都市南区東九条南河原町3

075-204-7900

<http://higashikujoforum.jimdo.com/>
E-mail/higashikujoforum@gmail.com

(→2 頁より続き)

DAISY 研究会はデジタルテキスト作成ツール「多言語 DAISY テキスト」での新たな外国人児童教育支援ネットワークを提案し、日本に在住する外国人の日本語・母国語学習に応用していくことを目指している。多様な文化的背景を持ったニューカマー外国人の子供たちは「日本語の習得」という大きな困難に直面して苦しんでいる。「日本語初期教室」「学習支援ボランティア」「学校通訳者の派遣」などの努力があるが多様なニーズに応えられていない。他方公立学校に通う在日コリアンの子供たちに、「民族学級」などの政策が取られているが十分ではない。多言語による外国人支援活動は要求される専門性の高さからボランティア人材に限られたが、こうした補助ツールによって支援組織側が支援の中身を見直し一層充実・高度化していく余裕も生まれ、要求される専門性ゆえに関わってこれなかった大学生や留学生たちが支援の輪に入ることができる。これはニューカマー外国人の支援ネットワークだけではなく、在日コリアン児童の民族の言葉を取り戻す活動にとってもきわめて有益といえ、こうしたネットワークが機能するためにはそれを支えるセンターが不可欠。京都・東九条の地から、世界に向けて多文化共生社会の力強いメッセージを発信して欲しい、と結ばれた。

6、報告 菅沼信さん

「多文化が息づくまちを目指す京都市国際化推進プランの現状—観光と多文化行政—」と題する報告は京都市国際化推進室交流推進担当課長の菅沼信さんからおこなわれた。

「京都市国際化推進プラン」策定の柱はコミュニケーション支援、生活支援、多文化共生の地域づくりの3点である。京都市内外国人登録者数は平成23年末41,200人で微減傾向が続く、日本全体の外国人登録者数も2年連続減少している。これはリーマンショックでの大量解雇による帰国増、東日本大震災による帰国増、日本国籍取得による帰化等に起因すると思われる。将来の「多文化人口構成」は一体どうなるか？外国籍市民の人口数は今後増加に転じるのか？これらは日本の社会情勢(景気動向、雇用情勢)や各施策・制度(外国人・留学生受入、教育、福祉、少子化対策)次第であり包括的な対策が求められる。地域に密着した多文化共生のまちづくりを進めるためには、外国籍市民等の地域社会参画や、自治体、商店街、PTAへの参加を図る必要がある。また、外国籍市民等の活力を活かした地域振興、多文化パワーを活かした仕掛けや仕組みづくりも重要であり、神奈川県営いちょう団地の「多文化まちづくり工房」等が参考例として挙げられた。今後外国人支援を行う個人・団体とつながり、顔の見える草の根レベルで外国籍住民が地域づくりの担い手として増加・参画できる仕組みを考えたい、と広い視点から報告がされた。